2005年度　森村・川村ゼミ議事録

6月1日分
記入者：石原桃子
司会者：小椋なつき

文献：『反美学-ポストモダンの諸相-』 ハル・フォスター編　勁草書房
1．近代-未完のプロジェクト　ユルゲン・ハーバマス（A）
2．批判的地域主義に向けて　ケネス・フランプトン（B）

発表グループ：
A（岩永・武道・柳瀬）
B（元島・藤村・山田）

議題

両班共に特に決まった議題の提示はなく、文献にそった内容で議論を進めていった。

グループの考察

A　ハーバマス自身が述べている、「近代性とは伝統に反逆すること」という特徴と、「認識的領域、道徳的-実践的領域、そして表現的領域のすべてを包み込む文化的伝統が必要とされる」という両発言に矛盾を見出すことができる。それは、B班の論文の冒頭文（「どうやって近代化すると同時に源泉へと立ち戻るか」）の問題意識にも通じているのではないか。

B　現代は自己批判という点が見失われ、個人主義的な状態に陥っている。現代がポストモダンの延長線上にあると考えることもできるが、新たな節目を迎えるときが迫っていると考えた際には、自己批判力を伴った普遍性というあり方をもう一度見直す価値がある。

議論の展開

A　ハーバマスの言う「近代のプロジェクト」に沿ってモダニズム、ポストモダニズムについて考えることは、新鮮であった。
　日常と文化を結び付けるというハーバマスの考えは明確だ。
　　シュールレアリストたちの過ちから学ばなければならないという姿勢を、「批判的に再適用」と理解した。

B　科学・道徳・芸術の3つの領域が結びついた状態とはどのようなものか？

A　モダニズムが出る前は元々統合されていたものが、モダニズムの動きによって分化

した。これを再接合することが「未完のプロジェクト」。

B　3つの領域をまとめてもうまく行くとは思えない。批判ばかりで明るい部分が見えない。

それぞれの文化領域の分離により、全てが小さく、弱くなってしまった。
それらが日常生活とくっつくことによって、文化を豊かにする。
→ハーバマスの批判は、構築するためにある。

（Bに向けて）ポストモダンの自己批判力とは具体的にどんなものか？
B　モダニズム、ポストモダニズム両方とも「批判力」については大差ない。
　しかし、モダニズムをただ否定して新たなものを提示したとしても、それはモダニズムが形を変えただけで繰り返していく。モダニズムの良いところは取り入れるべき。
　　→ハーバマスの言う「批判」と紙一重なのでは？
自己批判が欠かせない。自己に目を向けることによって成長していく。

3つの領域の統合が良いのか？それによって日常生活が豊かになるのだろうか？
　→アートと日常生活、そして豊かさとは何かという議論へ
・現在でも、アートと日常生活は必ずしも結びついていない。
・結びつけるための様々な試みはあるが、あまり定着していない。
　→アートに対する「距離」がある。
・豊かさ≒「自分」という存在を意味づけできること。

アートが無くなったらどうなるのだろうか？
・必要最低限のものだけになる。
・生活の中でホッとできる空間、時間を提供するものがアート。
（科学・道徳については・・・？）

記入者の考察

先に個人的な感想を述べると、今回の議論は非常に展開が難しかった。主にハーバマスの考える「未完のプロジェクト」についての議論となったが、そこから話題を発展させていくことがなかなか出来なかったように思う。しかし、両班の発表を通して、私自身も現代では「自己批判」の精神が弱くなっているのではないかと考えた。そのような点から見ると、文化が日常と結びつくことによって、本当にハーバマスが考えていた「豊かさ」がもたらされるかどうかはわからないが、彼が一度失敗に至ってしまった近代のプロジェクトについて「批判的に再適用する」ことを要求したことや、フランプトンの「はっきりとした批判を達成することで世界文化を担い、引き継ぐことができる」という考え方は、これからも引き続いてポストモダニズムを考えていく上で大変興味深いものであった。この文献を

読み終わる時に、自分たちにとってのポストモダニズムの捉え方がどうなっているのか楽しみだ。